

<論文>

修士論文としての翻訳: その意義と方法

“Translation thesis”: its aims and methods

武田珂代子* ラッセル秀子**

(*立教大学 **モントレー国際大学大学院)

Abstract

“Translation thesis” refers to a form of a Master’s thesis in a translation program, which generally consists of a translation of an extensive length of text accompanied by the translator’s theoretical commentary. This article discusses the main purposes and methods of completing a translation thesis, presents as an example the practice of supervising translation theses at the Monterey Institute of International Studies (MIIS), and suggests some guidelines for implementing the option of a translation thesis. The benefits of completing a translation thesis are laid out from the perspectives of developing translator competences as the goal of translator education, and are examined through a review of feedback from MIIS graduates on their experience writing translation theses. The translator competences examined include the abilities to manage a major translation project, to apply meta-language to analyze translation problems and justify their solutions, and to make use of information resources and translation tools.

1. はじめに

本稿の目的は、翻訳関連の大学院プログラムにおける修士論文として学生が比較的長い翻訳に取り組むことの意義を考察し、そうした「翻訳論文(translation thesis)」の要件設定に対する基本的アプローチを提案することである。現在、日本において、翻訳(および通訳)に明示的な焦点を当て、修士論文のオプションとして翻訳の提出を認める大学院の数は少ない¹。しかし、2007年時点で翻訳関連科目を提供している大学・大学院は180校以上を数え(翻訳研究分科会翻訳教育調査プロジェクト・チーム, 2008)、また、「卒業翻訳」の提出を学習の最終成果物の一つとして認める大学(東京女子大学、神戸女学院大学、上智大学など)は実際に存在する。これらの大学・大学院関係者が翻訳教育に関する参照・検討材料として利用できるような情報や分析の提供を本稿は目指している。

まず、翻訳者養成の目的を「翻訳者コンピタンス(translator competence)」の涵養とする視点に基づき、これまで提案された翻訳者コンピタンスを集約するものとして、欧州翻訳修士(European Master’s in Translation (EMT)) 専門家グループが制作したプロ翻訳者コンピタンス(Competences for professional translators, experts in multilingual and multimedia communication)のリストを略述する。そして、世界の大学院で実施されている翻訳論文の例を紹介しながら、その

特徴を整理し、翻訳者コンピタンスの涵養という目的に照らして翻訳論文の意義を考察する。次に、米国モンレー国際大学(Monterey Institute of International Studies, MIIS)大学院翻訳通訳プログラムを例として取り上げ、同プログラムにおける翻訳論文制作の具体的な手続きや指導法を説明し、その教育効果を探る1つの方法として翻訳論文に対する卒業生のフィードバックを検討する。最後にまとめとして、翻訳者コンピタンス涵養という視点に基づき、翻訳論文の要件設定における基本的アプローチおよび応用を提案する。

2. 翻訳者コンピタンスと翻訳者養成プログラムの目的

人が職業としての翻訳に従事するようになる径路はさまざまである。独習で試行錯誤を繰り返す、あるいは経験豊かな翻訳者に「弟子入り」して翻訳スキルを伝授してもらうなど個人レベルの手続きを経てプロ翻訳者の道に進む事例は昔からあることだろう。一方、学校、会社、通信講座など組織的、制度的な枠組みの中で翻訳者になるための訓練を受けることも可能だ。そうした訓練は、諸組織が専属の翻訳スタッフを育成する内部プログラムや、日本の翻訳学校のような営利目的の民間プログラムで施されることもあるが、世界的に見ると、高等教育機関が翻訳者養成の主要な担い手になっていることは少なくない²。

大学・大学院での翻訳教育も、言語・文学関係プログラム内の単発的な科目から、1年(修士)～5年(学士・修士プログラムを統合したもの)の比較的長期にわたるカリキュラムに基づく体系的なものまで多種多様だ。ここでは、本稿の目的に沿い、修了時に研究論文やそれに代わる成果物の提出が要求される長期的な翻訳者養成プログラムに焦点を置く。

大学・大学院での翻訳者養成に関する研究において、翻訳者のコンピタンス(スキルセットと呼ばれることもある)を同定し、学生がそのコンピタンスをいかに習得できるかを追究するアプローチが適用されることがある(e.g. Beeby, 2000; Schäffner and Adab, 2000; Pym, 2003; Kelly, 2005)。ここで鍵となるのは「翻訳者コンピタンス」という概念である。これは、翻訳者養成にあたっては、訳出技術(「翻訳コンピタンス(translation competence)」)だけでなく、プロ翻訳者として機能していくために必要なコミュニケーションスキル、態度、職業規範や職務倫理の理解なども包含する「翻訳者コンピタンス」を涵養すべきという考えだ(詳細は Kiraly (2000)、Bernardini (2004)を参照)。

翻訳者コンピタンスの内容についてはさまざまな提案(e.g. Beeby, 2000; Schäffner and Adab, 2000; Pym, 2003; Kelly, 2005)がなされてきたが、ここでは欧州委員会(European Commission)翻訳総局(Directorate-General for Translation)が指揮する EMT の専門家グループが2009年に提示したプロ翻訳者コンピタンスのリストを参照したい。EMT の提案を取り上げる主な理由は2つある。まず、機械翻訳、翻訳支援ツール、ボランティア翻訳などの進展で翻訳・翻訳者環境に「革命」が進行中(Pym, 2012)とされる状況を反映した「現代的」な提案となっている。また、11名の翻訳者、研究者、教育者で構成された専門家グループによる議論とコンセンサスに基づく提案なので、個々の研究者による提案よりも普遍性が高いと考えられる。EU内で活動する翻訳者を想定しているようだが、同提案中にはEUへの言及はなく、実際、過去に提案された翻訳者コンピタンスとの間に整合性を欠く内容は見当たらない。EMT提案は、翻訳者コンピタンスに関するこれまでの議論の集約と言ってもよいだろう。

EMT 専門家グループが提示する翻訳者コンピタンスのリストは以下の 6 分野から構成されている。(以下、日本語訳は筆者による。)

- 翻訳サービス提供能力 (translation service provision competence)
 - 対人関係面 (interpersonal dimension)
 - 翻訳産出面 (production dimension)
- 言語能力 (language competence)
- 異文化間能力 (intercultural competence)
 - 社会言語面 (sociolinguistic dimension)
 - テキスト面 (textual dimension)
- 情報検索能力 (information mining competence)
- 特定分野調査能力 (thematic competence)
- 技術的(ツール活用)能力 (technological competence (mastery of tools))

以上の 6 分野は相互依存関係にあるとされ、各分野の定義が具体的項目として同リスト中に提示されている³。このリストは翻訳者養成プログラムの終了時に学生が習得しているべき能力(目標)として提案されているが、それをどのような方法で達成するかは各プログラムに委ねると、EMT 専門家グループは述べる(EMT expert group, 2009, p.3)。つまり、翻訳者養成プログラムのカリキュラムや指導方法などはこの翻訳者コンピタンス達成に向けて計画、実施、評価すべきということだ。このアプローチに倣い、以下、翻訳論文の意義を翻訳者コンピタンスの涵養という視点から考察していく。

3. 翻訳論文の意義

本稿では、「翻訳修士プログラムの研究論文に代わるオプションとしての長い翻訳の実作で、通常、何らかの分析を伴うもの」を「翻訳論文(translation thesis)」と呼ぶ。これは、筆者が関係する MIIS の慣行に従った便宜上の名称だが、同様の内容に対し、異なる名称が用いられることがある。

例えば、オタワ大学の翻訳学(Translation Studies)修士課程には基礎研究と応用研究の 2 専攻があり、基礎研究では研究論文が、応用研究では「コメンタリー付き翻訳(commented translation)」あるいは「コメンタリー付き用語集または辞書ファイル(commented terminology or lexicography file)」が卒業要件となっている。「コメンタリー付き翻訳」は、5,000 語以上の翻訳で、起点テキストの説明、翻訳の動機、訳出上のアプローチを説明する緒言、および、関連する理論と方法論的背景知識の習得が確認できるようなコメンタリーを伴うものとされている(University of Ottawa, n.d., p.5)。

また、米国ケント州立大学の翻訳修士課程には、「翻訳ケーススタディ(Case Study in Translation)」という必修科目がある。これは以前「翻訳論文(Translation Thesis)」と呼ばれていたもので、長い翻訳、用語集、訳出中に直面した問題の批判的検討、その問題解決に用いられた

方略の説明を求めるものである(Kent State University, n.d.)。

日本国内に目を向けると、神戸女学院大学大学院通訳翻訳コースでは、修士論文の代わりに「翻訳プロジェクト」と呼ばれるオプションがあり、10,000語以上の翻訳でプロフェッショナル・レベルの質を達成し、訳出上の問題点を理論的に分析するコメントリー(20ページ以上)を付することが求められている(田辺, 2012)⁴。また、東京外国語大学国際コミュニケーション・通訳コースでは、修士論文の代わりに、日本語から英語への翻訳あるいは用語集を提出できる。日英翻訳のオプションでは、起点テキストは100ページ以上の本で、翻訳に加え、翻訳の意義や方針の説明、翻訳プロセスを記録したジャーナルを提出するという要件がある(鶴田, 2012)⁵。

以上、名称が何であれ、まとまった長い翻訳(書籍の数章分など)に取り組み、それに対する批判的考察を行うことを、修士課程の最終成果物として認めるプログラムは実際に複数存在するということだ。それでは、こうした翻訳論文は、翻訳者養成の目的とされる翻訳者コンピタンス涵養にいかん貢献できるのだろうか。以下、翻訳論文で実施されている、また実施可能と思われる要件を翻訳論文の特徴として整理し、前述の EMT 専門家グループによる翻訳者コンピタンスのリストと関連させて検討する。

まず、翻訳論文で学生が行う作業の主な特徴として、以下の項目が考えられる。

- ・ 自らテキストを選択し、出版社および作者から翻訳許諾を得る作業
- ・ トピックに関する広範なリサーチとパラレルリーディング
- ・ 用語集づくり
- ・ スコパス(目的)の設定とそれに基づく翻訳方略の同定
- ・ 指導教員などからのフィードバックに基づく修正
- ・ 訳出上の問題点および選択した解決法に関する理論的分析
- ・ 口頭諮問
- ・ 全体的なスケジュール管理

もちろん、これらの項目の中には、翻訳論文でなくとも、通常の翻訳クラスの枠組みで実施可能なものがあるだろう。しかし、学生の主体性、翻訳の分量、修正や推敲の時間、複数ソースからのフィードバック、広範なリサーチ、理論的分析などの点に照らすと、その程度や範囲のレベルが翻訳論文でははるかに高いことが想定される。

上記の項目はすべて、EMT による翻訳者コンピタンスリストに直接関係するものである。特に翻訳論文だからこそ、高レベルの涵養を期待できる能力としては以下のものが含まれるだろう。

- ・ 時間・ストレス管理能力(翻訳サービス提供能力:対人関係面)
- ・ 自己評価と責任能力(同上)
- ・ 翻訳の段階や方略の設定能力(翻訳サービス提供能力:翻訳産出面)
- ・ 訳出上の選択や意思決定を正当化できる能力(同上)
- ・ 方略や選択を説明するためのメタ言語の習得(同上)

- ・ 翻訳の校正と修正能力(同上)
- ・ テキストのマクロ構造と全体的整合性の理解・分析能力(異文化間能力:テキスト面)
- ・ テキスト理解における問題を説明・検討し、解決方略を見極める能力(同上)
- ・ リサーチ方略の開発能力(情報検索能力)
- ・ 検索結果の信頼性を判断する能力(同上)
- ・ 専門的テーマの情報を検索する能力(特定分野調査能力)
- ・ 各種ソフトウェア、翻訳支援ツール、用語データベース、レイアウトツールなどを効果的に利用する能力(技術的能力)
- ・ データベースやファイルを作成・管理する能力(同上)

つまり、翻訳目的と方略を設定し、広範なリサーチを行い、フィードバックに基づく推敲をくり返しながらい長い翻訳を完成させ、その理論的分析をするという翻訳論文は、訳出能力だけでなく、プロジェクト管理能力、問題解決能力、自己分析能力、リサーチ能力、翻訳支援ツール活用能力などの翻訳者コンピタンス習得につながる1つの翻訳教授法と言える。

特に、学生が自らの翻訳を振り返り、何らかの理論的枠組みを用いて訳出上の選択や方略を説明・正当化する作業には、上記以外にも3つの大きな意義があるだろう。まず、理論と実践を連関させることの重要性だ。大学院の翻訳者養成プログラムでは通常「理論」に関する科目がカリキュラムに含まれるが、それと翻訳演習が乖離しないような工夫が必要だろう。「理論」科目で学んだメタ言語を用い、翻訳に関する諸理論で提示されてきた概念や枠組みを基に、訳出上の自らの選択を説明する経験は、学生による理論の内在化につながると期待できる。また、この作業はさまざまな理論の有効性を試す機会でもあり、問題提起や継続的な議論に発展する可能性もある。2番目に、自らの翻訳を振り返る作業が、自律的で適応力のある翻訳者になる訓練として役立つという点がある。「革命」が進行中(Pym, 2012)という翻訳・翻訳者環境の中で、新しい市場のニーズや要件を適確に判断し、自らの能力の評価に基づき、迅速かつ適切な対応ができることは翻訳者の存続能力として重要だろう。翻訳理論の枠組みや概念をツールとして振り返りができる能力は、自律的な学習や変化に対する適応性に貢献できると考えられる。最後に、学生の翻訳プロセスを理解することは、教師自身の振り返りにとって重要だろう。学生が直面した問題および彼らが選択した解決法を知ることにより、教師は自らの指導法の有効性を確認し、新たな課題を見極める機会になる。(通訳教育における教師の振り返りについては Takeda (2010)を参照。)

以上、翻訳論文の意義について理論的考察を試みた。次に、翻訳論文の具体的な手続きや指導法を提示するために、筆者が関係する MIIS の例を取り上げる。

4. 事例: MIIS の翻訳論文

4.1 概要

MIIS は 1955 年、米国カリフォルニア州モンレーにて創設された専門職大学院である。2012 年現在、同校の翻訳通訳プログラムには、翻訳(Translation)、翻訳通訳(Translation & Interpretation)、会議通訳(Conference Interpretation)、翻訳・ローカリゼーション管理(Translation

& Localization Management)の4つの専攻課程がある。1985年に設立された日本語科のほか、中国語、ドイツ語、フランス語、韓国語、ロシア語、スペイン語科がある。翻訳専攻のカリキュラムや履修例については同プログラムのウェブサイト⁶を参照されたい。2012年現在、修士論文は必修科目ではなく、希望者のみが履修する選択科目である。修士論文を履修する学生は、“Thesis Manual” (Monterey Institute of International Studies, 2010)に則り、主指導教員の指導に従って、2年目の2学期間に渡り作業を進める。

4.2 修士論文の目的・種類

MIIS 翻訳通訳プログラムの“Thesis Manual”(前掲)では、修士論文の目的と種類について次のように定めている(筆者による翻訳。以下同様)。基本的には研究論文、翻訳論文(原則として外国語から母語への翻訳)、用語集論文の3つの選択肢がある。

目的

修士論文は、翻訳通訳研究分野における独自の研究を完成する能力、長いテキストを翻訳して翻訳プロセスの方略を説明する能力、コメントリー・参考文献・索引を伴う用語集論文を作成する能力を培うものである。(中略)

認められる修士論文の種類

1. 翻訳通訳研究分野の研究プロジェクト(20,000語以上)。
2. 翻訳されていない長いテキストの翻訳(20,000語以上)。コメントリーを伴うこと(2,000語以上)。
3. 既訳のあるテキストの翻訳(約15,000語)。再翻訳が必要な理由を論じたコメントリーを伴うこと(5,000語以上)。
4. 既訳の批評・分析(20,000語以上)。
5. コメントリー、参考文献、索引を伴う用語集論文。

(Monterey Institute of International Studies, 2010, p.3)

4.3 2011年度の事例

次に、筆者らが主指導教員・副指導教員をつとめた2011年の英日翻訳論文について、実際の作業事例を紹介する。作業におけるおおまかな推奨事項は“Thesis Manual”で提示されているが、具体的な指導方法、手順、日程は各主指導教員が決定する。2011年度(2011年8月29日から2012年5月11日まで)は、主指導教員の判断で下記のような日程を組んだ。

a) 原書・副指導教員の選択

学期開始前(夏季休暇中)に行った。学生が選択した複数の原書(英語)に目を通し、学生の能力と内容の難易度などを合わせて判断しながら相談の上、適切な原書を選択した。学生から原書の出版社あるいは著者に連絡させ、翻訳の許可を得た。また、副指導教員(または外部専門家)2

名を選択させ、該当者の許可を得た。

b) 試訳

600語分の試訳を2011年10月5日までに提出。意味やスタイルの問題、リソースの選択などについて主指導教員がフィードバックを行い、今後の作業日程について説明した。

c) 第1稿の提出

全体を11月から2月にかけて4分の1ずつ提出する分納の形を取った。各回の提出後、主指導教員がフィードバックを行った。フィードバックでは、引き続き意味やスタイルの問題について指導・検討したほか、用語集の作成・管理、リソース(辞書、事典、書籍、人材、ウェブサイトなど)の推奨、フォーマット指定、修正、時間管理などについても適宜話し合った。

d) コメンタリーの粗稿または概要提出

コメンタリーの粗稿または概要を2012年1月31日までに提出。主指導教員が全体の構成や参考文献などについて、フィードバックを行った。

e) 第2稿およびコメンタリー提出

第1稿のフィードバックを取り入れて作成した第2稿とコメンタリーの両方を同年2月15日までに提出。提出後、主指導教員と副指導教員1名が、フィードバックを行った。翻訳に関しては、上記c)で述べた方法で、また、コメンタリーに関しては、全体的な論理の組み立て、理論的枠組みや概念の確認、科学的な記述、文献引用の書式などについて主に指導・検討した。

f) 最終版提出

最終版の提出は同年3月25日(春季休暇最終日)とした。ただし、最終版の提出前に一部再提出が必要なものについてはその旨指導し、別途、提出日をそれぞれ設定して、フィードバックを行った。

g) 口頭諮問

主指導教員1名と副指導教員2名(または1名)が諮問委員となり、同年5月第1週までに実施した。口頭諮問はすべて公開だが、今年度は諮問委員以外の出席者はほとんどいなかった。

5. MIIS 卒業生のフィードバック

次に、実際に翻訳論文を作成した卒業生を対象にして、翻訳論文の学習意義について下記の通り簡易調査を実施し、結果を集計した。なお、修士論文は現在必修科目ではないこと、また今回の調査では、論文を提出した卒業生のうち、筆者らが連絡先を把握している者のみに連絡を取ったことから、対象者の人数は限定された。

5.1. 簡易調査の概要・結果

調査名:「翻訳卒業論文についての意識調査」

実施時期:2012年5月、実施方法:Eメールにて調査用紙を送付

対象者:MIIS卒業生16名(1992年卒から2012年卒まで)、回答者:13名

質問事項と結果:

1. 名前、2. 卒業年度、3. MIISでの専攻(本稿では省略)

4. 卒業後の職業・現在の職業

翻訳者:8名、通訳者:2名、翻訳・通訳者:3名

5. 翻訳卒業論文の原文タイトルと著者名（抜粋）

“The Asian American Movement” by William Wei

“Busier than Ever!” by Charles Darrah, James Feeman, J.A. English-Lueck

“The Collapse of Chaos: discovering simplicity in a complex world” by Jack Cohen and Ian Stewart

“Exploring Translation Theories” by Anthony Pym

“The Japanese in the Monterey Bay Region” by Sandy Lydon

“The Origins of Simultaneous Interpretation: The Nuremberg Trial” by Francesca Gaiba

“Progeny: The Children of the White Lions” by R. T. Kaelin

『アジア連合への道——理論と人材育成の構想』天児慧

『在日外国人』田中宏

『私のあしながおじさん』久保美津子

6. 翻訳卒業論文は翻訳の学習・実践に役立ったか(1=「役に立たなかった」、2=「あまり役に立たなかった」、3=「どちらとも言えない」、4=「役に立った」5=「たいへん役に立った」)

1	2	3	4	5
0人	0人	1人	7人	5人

7. 翻訳卒業論文を作成するときに発生した作業のうち、下記の項目は翻訳の学習・実践に役立ったか(1=「役に立たなかった」、2=「あまり役に立たなかった」、3=「どちらとも言えない」、4=「役に立った」5=「たいへん役に立った」、NA=「適用せず」)

各項目の定量化は、4もしくは5を選択した回答者の割合を算出することで行った。上位5つを黄色のハイライトで示した。

	1	2	3	4	5	NA	4 または 5 (%)
長い原文を訳すこと	0	0	2	1	10	0	85
B 言語(外国語)の理解力を深めること	0	0	0	6	7	0	100
A 言語(母語)の文章力を高めること	0	0	3	4	6	0	77
A 言語(母語)の校正スキルを高めること	0	0	2	5	6	0	85
主指導教員・副指導教員とのディスカッション	0	0	3	4	5	1	75
ほかの学生などとのディスカッション	1	1	0	4	5	2	82
翻訳作業を振り返り、理論的分析をしたこと	0	0	5	3	4	1	58

翻訳研究・理論の学習	0	1	3	4	4	1	67
適切なリソースの選択(書籍、ウェブサイト、人材など)	0	1	1	4	7	0	85
必要な情報を詳しく検索・調査する	0	1	0	4	8	0	92
スケジュール・時間の管理	0	0	4	4	5	0	69
所定の書式や指示事項に従うこと	2	0	4	2	4	1	50
ターミノロジー(用語・訳語)の管理	0	1	3	7	2	0	69
必要なテクノロジーを使いこなす(文書ファイルの書式設定やその他の機能、および各種アプリケーションなど)	2	0	4	3	2	2	45
業界の商習慣を学んだこと(著者・出版社との連絡など)	0	2	4	3	2	2	45

(1~NA 行の数字の単位:「人」)

8. その他、翻訳卒業論文作成のメリットや問題点などについてのコメント

以下、主なコメントを卒業年度の新しい者から順に並べた。(原文の敬体は常体に直してある。)

回答者 A:「プロの翻訳者としてすでに活動経験はあったが、翻訳卒業論文作成はこれまでの自分の仕事スタイルを振り返るという点で非常に有意義であったと考える。また現実の仕事のうえでは自分で興味のある分野や未経験の分野の文献を訳す機会はないので、新しい分野にチャレンジできるという意味でも有意義だったと思う。翻訳理論のなかには、翻訳の実務と関連性の低いものがある、との批判もあるようだが、論文作成の過程で学術文献を読み、DTS(記述的翻訳研究)の文献には翻訳の実務に役立つものも多いと感じた。翻訳者として視野を広げ、自分の仕事を相対化してとらえるうえで、非常に役立つ経験だと感じた。実務面では、実際の仕事では編集者からフィードバックを受けることはあるとはいえ、時間の制約からその内容は限られたものになりがちだ。指導教官や周囲の学生と議論しながら、自分の翻訳の特徴や改善すべき点を話し合う、というのは得難い経験だと思う。また日頃の仕事のなかでは時間に追われ、翻訳の質や効率を高めるための新しい試みをする余裕がなかなかないが、論文作成中は指導教官の支援を受けながら、翻訳支援ソフトの活用⁷など、新しいスキルを身につけられたことも有益だったと考える」

回答者 B:「授業では訳す機会のない長文の翻訳に取り組めたことは大きな学びだった。また、作業に費やせる時間や期間も通常より長く、原文と訳文を何度も読み直すことで、最初は見逃してしまったニュアンスの微妙な違いから訳語の選択まで、とことん突き詰めることができたのも翻訳の学習になった。これに加え、翻訳理論を実際に活用する場となったのも大きな学びだった。(中略)演習に理論が役立つかどうかは議論もあるのかもしれないが、私自身は理論を学びその裏付けを得たことで、翻訳も通訳もスキルが上がったように感じている(スコポス理論や effort モデル等)。

ただ、よほど意識しない限り、せっかく学んだ理論を実践に結びつけるのは、授業だけでは難しいのかもしれないと感じる。演習では、突っ込んだ理論の議論までする時間が十分に取れないという事情もあると思う(翻訳プラクティカムや2年次の書籍の翻訳クラス⁸などは違うのかもしれないが)。『理論は理論、演習は演習』と2つの柱が別々に分かれたままになってしまうこともあると思うが、その中でも、翻訳論文の緒言というかたちで、いわば『絶対に理論を使わなければならない』状況に置かれたことで、翻訳理論をより深く理解し、自分の翻訳・通訳スキルの一部として使いこなす基盤を作るきっかけになったように思う」

回答者 C:「MIS で取り組んだものの中で最も長い(多い)分量の翻訳であり、短文の翻訳の時とは異なる課題(全体を通読するにもある程度の時間を要し、新鮮な目で見直すためには、その余裕をもった翻訳計画が必要、また特に学術関連の翻訳では、早い段階で、良質な参考文献を調査し、その分野の用語だけでなく、主要な研究者等を把握し、役立ちそうな書籍類を入手できるようにしておくと感じた)を経験することができた。『翻訳作業を振り返り、理論的分析を行うこと』が翻訳論文の主眼であると思うが、取組み時点で、理論的分析をどのように行うかということの把握ができていなかった。結果的に翻訳と理論分析の時間配分が悪く、十分な理論分析ができたとは言いがたい。翻訳理論関連の本をもっと意識的に読んでおく必要があったと思われる」

回答者 D:「緒言の中の分析の部分は、過去の論文を参考にしながら書いたが、担当教官から具体的な指示、アドバイスがあるとより書きやすいかもしれない」

回答者 E:「やはり『長い原文を訳すこと』がとても重要で、私にとって欠かせない経験だった、といっても過言ではない」

回答者 F:「Thesis に取り組むまでは 20,000 語を訳したことがなかったので、翻訳者になる前に 20,000 語が実際にはどの程度なのかを経験できたのは、個人的には役に立った。ただ翻訳卒業論文はあくまで論文であり、上記の項目のうちそれとはあまり関わりのないこと(長い原文を訳すこと、文章力を高めること、翻訳力の向上、などなどはあくまで学生個人の目標・課題)に学生が重点を置いている場合は、翻訳卒業論文ではなく、別の翻訳プロジェクトに取り組んだ方がよいと思う」

回答者 G:「私は卒論で翻訳した本が翻訳学理論書だったので、非常に勉強になった。実際に社内通訳者として実践したり、ほかの通訳者とやりとりする中で、この卒論を通して学んだ概念を当てはめて考えることを何度もしてきた。著者と直接連絡をとって質問できたことも非常にありがたく、よい経験となった」

回答者 H:「長い文章を訳すことで、自分の訳出時間や校正にかかる時間が把握でき、突発の仕事を引き受けた時も、ペース配分がうまくできたと思う」

回答者 I:「在学中、授業の中では長い文章を翻訳する機会がないため、まとまった量の文章の翻訳をするいい練習になった。ただ、翻訳に手がいっぱい校閲に十分時間を掛けなかったと、最後になって思った記憶がある。また、専門分野の方にアドバイザーになっていただいたにもかかわらず、手を煩わせるのが申し訳なくて、ほとんど相談もしなかったのが、今になるともったいなかったように思う。そのようなリソースも活用すること自体が卒業論文の勉強・メリットになったはずだと思う」

回答者 J:「毎週の課題をこなしながら長い卒論を仕上げるのはかなり大変だった。ただ、翻訳の仕事についてからは、あの長さの翻訳をやったことは非常に勉強になったと思う。また、あの分量だと一応レジュメ⁹にも含めることができるので、それも利点だと思う」

回答者 K:「自分で訳したい本を探し、それをかなりの量訳すと言うのはおもしろいプロセスだったし、学ぶことも多くあった。何人もの人に見てもらい、何度も何度も読み直して校正するという作業は、なかなか経験できないことなので、そういう意味で有意義だったし、終わった後の達成感も格別だった。ただ、その後就職し、翻訳者としてスピードを要求される仕事をしていく中で、翻訳卒業論文の経験がどれほど役に立っているのかは、正直言ってわからない。でも、実際に働き出せばあのようにじっくり翻訳を見つめる余裕はないので、ああいう経験も重要だったと個人的には思う。難しかったのはスケジュールの管理、やる気の持続だろうか」

5.2 考察

調査の設問 6 の結果は、回答者 13 名中、【4=「役に立った」】が 7 人、【5=「たいへん役に立った」】が 5 人と、翻訳論文が翻訳学習・実践に役立ったと感じると考える対象者が多かったことを示している。

設問 7 では、【4=「役に立った」】もしくは【5=「たいへん役に立った」】を選択した回答者の割合が最も高かった項目は、「B 言語(外国語)の理解力を深めること」が 100%、「必要な情報を詳しく検索・調査する」が 92%、「長い原文を訳すこと」、「A 言語(母語)の校正スキルを高めること」、「適切なリソースの選択(書籍、ウェブサイト、人材など)」がそれぞれ 85%となった。

設問 8 では、多岐に渡るコメントを得たが、特に時間をかけて長いテキストの翻訳をした利点について繰り返し指摘されている。(回答者 A、B、C、E、H、I、J、K のコメントを参照。)

回答者が役に立ったととらえた以上の項目について、通常の翻訳クラスの課題と翻訳論文を比較して考えてみる。MIIS の英日翻訳クラスの課題は、400 語以上のテキストを 1 週間以内に翻訳・校正して提出する場合はほとんどである。毎回、異なる分野のテキストを扱うことが少なくない。実務翻訳で実際に使われたものを訳すことも多く、必ずしもいわゆる文章作法の手本になるようなテキストばかりではない。また、訳出にはリサーチが必要な場合が大半だが、1 週間という限られた時間の中では、調査がおざなりになることもあるかもしれない。

一方、翻訳論文の場合は、上述の通り長さ 20,000 語のテキストの訳出作業を 2 年目の 2 学期間かけて行う。テキストはプロが書いた、良質の文章であることがほとんどである。それを何度も読み直し、さまざまなリソースを使って調査を行い、内容を咀嚼しながら、翻訳・推敲を進める。長期間取り組むことによって、短期間では理解しきれなかったような箇所の解釈も深めることができる。さらに、教員から与えられる課題ではなく、自分が選んだテキストを翻訳するため、取り組みに際するモチベーションも大きく異なると思われる。

一方、評価が低かった項目について見ると、【1=「役に立たなかった」】の上位 2 つは、「所定の書式や指示事項に従うこと」、「必要なテクノロジーを使いこなす(文書ファイルの書式設定やその他の機能、および各種アプリケーションなど)」となっている。

回答者が役に立たなかったと感じた具体的な理由は特定できないが、前者については”Thesis Manual”を徹底させ、教員の指導方法を統一することが改善の一助となるかもしれない。書式や指示事項に従うことは、翻訳者としての業務において必須要素のひとつであり、実務への準備としても指導をいっそう強化することが望ましい。

後者についても、教員によって指導内容が大きく異なることから、やはり指導方法の統一が評価改善につながると考えられる。また例えば、文書ファイルや、筆者が学生に推奨している用語集管理ツールだけでなく、翻訳メモリーや機械翻訳、あるいは音声認識ソフトウェアなども翻訳作業中に実験的に試させてみれば、ユーザビリティを比較・評価する機会にもなるだろう。

その他、今後の課題とさらなる調査の可能性を下記にまとめる。

a)「翻訳研究・理論の学習」について

翻訳論文のコメンタリーで翻訳研究・理論を明示的に取り入れるように積極的な指導を始めたのは 2005 年以降である。にもかかわらず、同年以前に論文を作成した回答者もこの項目に高評価をつけた者が少なくなかった。これは「翻訳研究」、「翻訳理論」という用語に対する理解の不一致に起因すると思われる。実際にある回答者に確認したところ、「翻訳研究」、「理論」を個人的所感に基づく翻訳手法の「理論づけ」ととらえていることがわかった。理論や研究に深く関わる本格的なクラスが MIIS のカリキュラムに含まれるようになったのは 2005 年以降であり、学問としての翻訳学における理論や実証研究の展開について認識が十分でない卒業生がいる可能性がある。

b) 調査の匿名性について

今回は調査を記名式で実施したが、匿名で実施していれば、結果は多少異なっていたかもしれない。対象者のなかには、筆者らが主・副指導教員として担当した卒業生もいたため、否定的なコメントが差し控えられた可能性がある。

c) 必修科目として論文を作成した回答者との区別について

前述のように、2012 年現在、修士論文は必修科目ではない。だが、1995 年以前は必修科目であり、その後、翻訳専攻の学生のみ必修という時期を経て、現在に至っているという経緯がある。今回の調査では、必修科目として論文に取り組まざるを得なかった者と、自ら選択して取り組んだ者とを区別していない。両者の間では、必然的にモチベーションやストレスのレベルなどが異なる

可能性がある。その点を加味した質問の仕方をしていけば、結果に多少影響があったかもしれない。(例えば、会議通訳専攻の学生に翻訳論文を強いることの是非や、翻訳論文作成のために卒業が遅れた事例などについての質問をしていけば、否定的なフィードバックが増えていたかもしれない。)

d) 主指導教官間の指導方法などの統一について

その他の項目において結果にばらつきが見られたのは、前述の通り、指導教員間で必ずしも具体的な指導方法、手順、日程が統一されていないことに一因があるだろう。逆に言えば、卒業論文の学習効果の統一・向上をはかるためには、具体的な指導方法などもすべて”Thesis Manual”に明示することが必要だと考えられる。

6. まとめ

以上、翻訳関連の大学院プログラムにおける翻訳論文の意義について、翻訳者コンピタンスの観点から考察し、具体的な事例として MIIS の翻訳論文の手続きや指導法、また翻訳論文経験者のフィードバックを検討してきた。まず、翻訳者養成の目的を翻訳者コンピタンスの涵養と捉え、EMT 専門家グループが提案した翻訳者コンピタンスのリスト中、特に翻訳論文を通じた涵養が期待できるものとして、言語能力だけでなく、対人関係能力、特定分野調査能力、ツール活用能力などの諸項目を提示した。また、予備的調査ではあるが、MIIS 卒業生のフィードバックに基づき、通常の翻訳クラスあるいは卒業後も経験できないような長い翻訳に取り組みことの意義や特に学習効果があったとされる項目を、翻訳論文経験者の視点から検討した。

最後に、上記の考察をふまえ、翻訳論文の要件を設定する上での基本的アプローチおよび応用を提案したい。まず、訳出能力だけでなく、プロ翻訳者として機能するために必要な翻訳者コンピタンスを涵養するという視点を、翻訳論文の指導でも貫く必要があるだろう。そのため、出版社や著者との交渉、主・副指導教員のフィードバックをもとにした修正、スケジュール管理、訳出における選択の説明・正当化、書式などの遵守、リサーチ力、ツール活用などを取り込んだ要件の設定が望まれる。例えば、以下のような項目が翻訳論文のガイドラインあるいは要件として推奨できるだろう。

- ・ 翻訳するテキストの選択、テキストの出版社および著者との翻訳許諾交渉は学生が主体的に行う。
- ・ 各種リサーチが必要となる専門的内容のテキストを推奨する。
- ・ 訳出上の問題と解決法の選択に関し、コメントリーおよび口頭諮問で説明・正当化を求める。
- ・ 用語集の作成を求める。
- ・ スケジュールの設定と管理を求める。
- ・ 主・副指導教員やその他のリーダーからのフィードバックをもとにした徹底的な推敲・修正を求める。
- ・ 書式やスタイルの遵守を求める。

- ・ 翻訳支援ツールを推奨する。
- ・ 以上のような要件・推奨はすべてマニュアルに明記し、異なる教員間でも一貫性のある指導ができるようにする。

また、翻訳実務の現状を鑑み、翻訳論文の適用範囲を広めることが可能だ。まず、翻訳が一人で完結する作業ではなく、複数の人々が異なる役割(翻訳者、修正者、編集者、プロジェクト管理者など)を担当するプロジェクト作業として取り組まれる傾向が強い市場の状況(e.g. Gouadec, 2007; Dunne & Dunne, 2011)に照らし、グループとして翻訳論文に取り組む意義について検討する価値があるだろう。「チームワーク能力」など対人関係能力の涵養や社会的構成主義にもとづく翻訳教育(Kiraly, 2000)の効果が期待できる。さらに、機械翻訳や翻訳メモリーなど翻訳支援ツールを積極的に活用し、エディティングやユーザビリティ評価に焦点をおく翻訳論文の可能性も考えられる。翻訳するテキストに関しても、書籍だけでなく、視聴覚メディアの字幕やウェブサイトの翻訳など、翻訳要件の異なる多様な形態のテキストに取り組むこともできよう。いずれにしても、翻訳者としての振り返りが必要で、機械翻訳なり字幕翻訳の要件と制約を分析し、自らの翻訳方略や選択などを明確に説明するコメントリーの重要性は認識されるべきである。

(本稿の後に、2012年5月にMIISに提出された翻訳論文中の「翻訳者コメントリー」の抄録が2本掲載されている。学生が自らの翻訳を振り返り行った理論的分析の例として参照されたい。)

【謝辞】: 本稿の作成にあたり、簡易調査にご協力いただいたMIIS卒業生の方々に感謝いたします。

.....
【著者紹介】

武田珂代子(TAKEDA Kayoko)立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授。モンレー国際大学大学院日本語翻訳通訳プログラム元主任。著書に『東京裁判における通訳』、*Interpreting the Tokyo War Crimes Trial*、訳書に『翻訳理論の探求』(A・ピム著)など。

ラッセル秀子(RUSSELL Hideko)モンレー国際大学大学院助教授、日本語翻訳通訳プログラム主任。主な訳書はマイケル・ポーラン著『雑食動物のジレンマ』(東洋経済新報社、2009年)、マイケル・ポーラン著『フード・ルール』(東洋経済新報社、2010年)。

.....
【注】

1. 神戸女学院大学大学院通訳翻訳コースおよび東京外国語大学国際コミュニケーション・通訳コースは、修士論文の代わりとして翻訳提出を認めるプログラムとして知られている。
2. 世界の大学・大学院における翻訳プログラムに関する情報は Intercultural Studies Group が制作・更新する Translator-Training Observatory (<http://isg.urv.es/tti/ttifront.htm>)などで参照できる。
3. 詳細は EMT expert group (2009)を参照。

4. 田辺希久子(2012)筆者との E メールコミュニケーション(2012年5月)
5. 鶴田知佳子(2012)筆者との E メールコミュニケーション(2012年5月)
6. 詳細は以下のウェブサイトを参照。
<http://www.miis.edu/academics/programs/translation/curriculum>
7. 2011年度の主指導教員を務めた筆者が推奨した、用語集管理ツール「Simply Terms」、および同ツールに付随したテキストエディタ「秀丸エディタ」用秀丸マクロのことを指す。
8. 約4,000語のテキスト(書籍)を各学生が選んで翻訳し、学生間フィードバックをもとにディスカッションを行う2年次科目のことを指す。
9. 履歴書のことを指す。

【参考文献】

- Beeby Lonsdale, A. (2000). Evaluating the development of translation competence. In C. Schäffner & B. Adab (Eds), *Developing Translation Competence* (pp. 185-198). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Bernardini, S. (2004). The theory behind the practice: translator training or translator education? In K. Malmkjær (Ed.), *Translation in Undergraduate Degree Programmes* (pp. 17-30). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- EMT expert group. (2009). *Competences for professional translators, experts in multilingual and multimedia communication*.
http://ec.europa.eu/dgs/translation/programmes/emt/key_documents/emt_competences_translators_en.pdf (May 18, 2012).
- Dunne, K. J. & Dunne, E. S. (Eds.). (2011). *Translation and Localization Project Management: The Art of the Possible*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Gouadec, D. (2007). *Translation as a Profession*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 翻訳研究分科会翻訳学会翻訳教育調査プロジェクト・チーム(水野的・長沼美香子・茨田英智・山田優・河原清志)(2008)わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要『通訳翻訳研究』第8号: 279-283.
- Kelly, D. (2005). *A Handbook for Translator Trainers*. Manchester: St. Jerome.
- Kent State University. (n.d.). *Institute for Applied Linguistics, M.A. Coursework*.
<http://appling.kent.edu/graduate/macoursework.cfm> (May 18, 2012).
- Kiraly, D. (2000). *A socialconstructivist approach to translator education: empowerment from theory to practice*. Manchester: St. Jerome.
- Monterey Institute of International Studies. (2010). *Thesis Manual*.
- Pym, A. (2003). Redefining Translation Competence in an Electronic Age: In Defence of a Minimalist Approach. *Meta* 48 (4), 481-497.
- Pym, A. (2012). Democratizing translation technologies – the role of humanistic research. In V. Cannavina and A. Fellet (Eds.), *Language and Translation Automation Conference* (pp.14-29).

Rome: The Big Wave.

http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/research_methods/2011_rome_formatted.pdf (May 15, 2012).

Schäffner, C. and Adab, B. (2000). *Developing Translation Competence*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Takeda, K. (2010). What interpreting teachers can learn from students. *Translation and Interpreting* 2(1): 39-47.

University of Ottawa. (n.d.). *Faculty of Graduate and Postdoctoral Studies, Translation Studies (MA)*.
<http://www.grad.uottawa.ca/Default.aspx?tabid=1727&monControl=Programmes&ProgId=609>
(May 18, 2012).